

中学校における取組

中学校の通常の学級においては、特別な支援を必要とする生徒への指導・支援が取り組まれつつあるが、日常的に配慮しやすく、容易にできる取組が行われてきている一方で、事前の準備を要する視覚的な情報の提供や習熟の程度に応じた教材・教具の工夫などは、取り組まれにくい現状がある。そのため、生徒一人一人に応じるためのアセスメントの実施、及び教材・教具の具体的な工夫が必要になる。

そこで、中学校における取組では、生徒一人一人に応じた一斉指導の実践について紹介する。

1 C中学校の取組（1年生、美術科、40人一斉指導）

(1) 個に応じるためのアセスメント

対象となる生徒に対しては、行動観察を行い、実態を把握していたが、行動観察のみで把握しづらい部分もあり、客観的な検査であるWISC-Ⅲを実施した。しかし、その結果は、行動観察で把握した実態と整合するものがほとんどであった。

ア アセスメントの方法

夏休み期間中に特別支援学級担任が実施し、結果の分析は当教育センターで行った。

イ 対象となる生徒

全般的な知的発達水準は平均の域にあるものの、耳から聞くよりも目で見た方が理解しやすい。しかし、目で見たものを素早く記憶することは苦手である。

目で見えて処理する速度に弱さが見られるため、目を見たことをすぐに覚えることや形を正確にとらえること、物事を素早く処理することが苦手と思われた。そのため板書を写すには、板書量の調整や十分な時間を取ることが必要と思われた。また、他の要因として手先の不器用さも考えられた。

ウ 教科担任の行動観察による生徒の実態とWISC-Ⅲの分析との整合

教科担任は、生徒がノートを最後まで記録できなかったり、美術作品を最後まで作り終えられなかったりすることを行動観察で見取っていた。このことは、WISC-Ⅲの処理速度が弱いという結果と整合するものであった。また、視覚からの支援がなく、聴覚からの情報のみの場合、授業への集中力の弱さがあることも授業中の様子から推測されていたが、これも検査結果と整合している。

客観的な検査を行うまでもなく、日ごろの行動観察により、生徒の実態をかなりとらえることが可能であり、そのつまずきの要因を把握することで、生徒に適切な指導及び必要な支援をすることができるかと推測される。

エ 美術科におけるつまずきの要因の見立て

板書を写す作業が遅いために、ノートを最後まで書き終わらないのは、視覚的な記憶の弱さが考えられた。また、聴覚からの情報のみ与えられた場合に、授業への集中力がなくなるのは、分かり



写真13 プロジェクタを見つめる対象の生徒（白いシャツ）

やすい視覚からの情報が不足するためと考えられた。

(2) 一斉指導における具体的な指導・支援

ア 対象となる生徒が視覚的な支援を必要としているため、一斉指導にも視覚的な支援を取り入れ、すべての生徒にとって、分かりやすくなるように、プロジェクタで、教材等を大きく提示し見やすくする（写真13）。

イ 導入部分で、補色残像をプロジェクタで全生徒に体験させることで、本日の授業への興味・関心を高めるようにする。



写真14 机間指導時の個別指導

ウ ワークシートや板書で、授業の流れを分かりやすくする。

(3) 個に対する具体的な指導・支援

ア 座席は、集中できるようにスクリーンの前にする。

イ 机間指導の際に、何をすればよいか分かるように言葉掛けをする（写真14）。

ウ ワークシートへの記入は、十分な時間を確保する。

エ 忘れ物がある場合は、貸し出しできるように準備しておく。

オ グループ学習の際、友達とうまくかわかれず、一人取り残される状況を改善するために、意図的に発表者の役割を担わせる。

(4) 指導案

1 題材名 美術科学習指導案 「カラーコーディネーター」になろう（Ⅱ）

2 題材の目標

- (1) 色の性質のおもしろさに気付く。【関心・意欲・態度】
- (2) 色の性質について考え、理解する。【発想や構想の能力】【鑑賞の能力】
- (3) 生活の中での色の働きについて理解する。【鑑賞の能力】
- (4) 美術の重要性を再確認する。【鑑賞の能力】

3 指導計画（全4時間）

主 題	時間	学 習 内 容
(1)「カラーコーディネーター」になろう（Ⅰ）	1	・補色残像実験 ・補色の性質 ・補色の混色 ・補色対比
(2)「カラーコーディネーター」になろう（Ⅱ）	1 (本時)	・補色関係のある色による配色 ・色の働きや役割
(3)「カラーコーディネーター」になろう（Ⅲ）	1	・色の進出，後退，膨張，収縮 ・明度対比 ・彩度対比 ・色相對比
(4)「カラーコーディネーター」になろう（Ⅳ）	1	・色を与える心身への影響 ・重さの感覚と色

4 本時の実際（2／4）

(1) 本時の目標

ア 色の性質のおもしろさに気付く。【関心・意欲・態度】

イ 色の性質について考え、理解する。【発想や構想の能力】【鑑賞の能力】

ウ 生活の中での色の働きについて理解する。【鑑賞の能力】

(2) 学び方の違いについての配慮事項

指示や説明をするときは、注意の集中を促してから、絵や写真を映像で見せ、分かりやすく指示したり、説明したりしていきたい。また、机間指導で言葉を掛け、作業が中断しないように指導や助言をしていきたい。

(3) 展開

過程	主な学習活動	全体への指導：○ 個への指導・支援： ☐ 評価 (◎)
導入 12分	1 前時の学習を振り返る。 ・ カラーコーディネーターについて ・ 補色について 2 補色のおもしろ実験をする。 ・ 写真のネガを見せ、その後モノクロの同じ画像を見ると、カラー写真に見える実験をする。 3 本時の学習目標を確認する。 「カラーコーディネーター」 になろう (Ⅱ)	※【 】は、指導・支援の意図 座席は、集中を促すためスクリーンの前の席にする【座席位置の配置】。 ○ 前回の授業を振り返らせる。 ○ ワークシートに記入しているか確認する。 ○ 映像を使って分かりやすく、体験させる。 ○ 体験できたか確認をとる。 板書を写す時間をとるようにする【苦手な情報処理への負担の軽減】。
展開 35分	4 信号機の色や形状について、グループごとに予想を話し合い、発表する。 ・ 信号機の青色は（青or緑）どちらか。 ・ なぜ信号機の青色は青緑なのか。 ・ 自動車用信号機の赤は（左・中央・右）どこにあるか。 ・ 歩行者用信号機の赤は（上・下）どちらか。 ・ 信号機の赤はなぜ右と上にあるのか。 5 補色関係にある色を使って、文字を着色する。 6 補色関係にある色を用いた配色について作品から受ける印象を話し合う。	○ パワーポイントを使用し、視覚からの情報を提示するとともに、分かりやすく指示を出す。 注意の集中を促してから、指示を出す【注意喚起の言葉掛け】。 ○ 机間指導で、話し合いに参加しているか確認する。 ○ ワークシートに記入しているか確認する。 正解している場合、称賛の言葉掛けをする【称賛・承認】。 板書を写す時間をとるようにする【苦手な情報処理への負担の軽減】。 ◎ 色の性質について考え、理解できたか。(発表、ワークシート) ◎ 生活の中での色の働きについて理解できたか。(発表、ワークシート) 忘れ物は、教師用を貸し出す【できる状況づくり】。 ○ 机間指導で、着彩作業でつまづいていないか確認する。 作業が止まっている場合は、言葉を掛け、アドバイスを【注意喚起の言葉掛け】。 ◎ 色の性質のおもしろさに気付いたか。(着色作業・意見の交流) ○ 今後の作品制作や生活に、補色の性質を生かすよう伝える。
終末 3分	7 本時のまとめと次時の内容を確認する。	○ 今後の作品制作や生活に、補色の性質を生かすよう伝える。

2 D中学校の取組（2年生，国語科，40人一斉指導）

(1) 個に応じるためのアセスメント

対象となる生徒についての，行動観察等から得られる実態は，以下に示すとおりである。

- ・ 当初は，小学校の漢字の読み間違いが多かったが，だいぶ読めるようになってきた。
- ・ 書くスピードは遅い。
- ・ 言葉が少なく，年齢相応の言葉を使わない。
- ・ 運動は，基本的なものはできる。
- ・ 登校は早い，忘れ物が多い。
- ・ 生活習慣，行動・社会性ともに問題はみられない。

また，アセスメントシート（試案）からチェックのついたつまずきの項目を抜粋すると，以下のとおりである。

領域	つまずきの項目		つまずきの主な要因
聞く	3	新しい言葉をなかなか覚えられない。	聴覚認知，言語能力，記憶
	5	指示の理解が難しい。	聴覚認知，言語能力，思考，記憶
読む	11	新しい言葉の読みがたどたどしい。	聴覚認知
書く	18	板書を写すのが遅い。	視覚認知，記憶，微細運動
	23	作文は限られた量である。決まったパターンである。筋道が通らない。内容的にとぼしい。書いているうちに主題とずれてきてしまう。（気持ちや様子を表す言葉が使われない。）	言語能力，思考，記憶
計算	30	学年相応の文章題を解くのが難しい。	言語能力，思考
推論	32	表やグラフを読んだり，まとめたりすることが難しい。	視覚認知，言語能力，思考
	33	抽象的な概念や事の因果関係を理解することが難しい。	言語能力，思考
	34	目的に添って行動を計画することや，順序立てて課題解決に向かうことができない。	言語能力，思考，記憶

つまずきのチェックがついた項目数は，視覚認知2，聴覚認知3，言語能力6，思考6，注意0，記憶5，微細運動1，粗大運動0であった。以上のことから，視覚認知と聴覚認知に差はなく，状況により，より分かりやすい情報入力を考える必要がある。

また，言語指示は，分かりやすく簡潔にする必要があり，場合によって，繰り返すことも必要となる。思考については，順序立てて考えられるような手立てをとることが必要である。記憶の弱さも考えられるため，記憶の保持ができるように，常に見て確認できるようにしておくことが必要である。

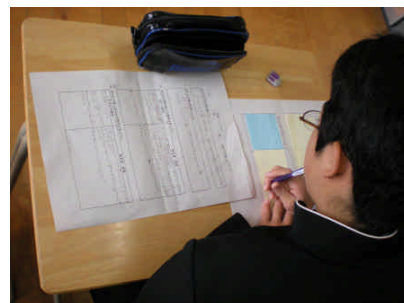


写真15 前時のワークシートを見ながらまとめている様子

(2) 一斉指導における具体的な指導・支援

ア ノートに記入していくと、以前に書いたものと、今書いているものを並べて見るができずに作業に時間がかかるため、一目で比較できるワークシートを準備する（写真15）。

イ 根拠に基づいた文章が書けるように、ワークシートは段階を踏んだものにする。

ウ 学習形態は、1時間のうちで目的に応じて、個、ペア、グループなどの形態を工夫する（写真16）。



写真16 同じテーマのペアで話し合う

(3) 個に応じた具体的な指導・支援

ア 座席は、教卓に近い、個別に言葉掛けがしやすい席にする。

イ 指示を理解できていない場合は、分かりやすい言葉に置き換え、具体的な助言をする。

ウ 前に書いたことを忘れないため、また、書く文字の量を減らすために付せんを活用する。

第2学年 国語科学習指導案

1 単元名 5 事実と意見

2 教材名 「モアイは語るー地球は語る」根拠を明らかにして書こう 意見を伝える（光村）

3 単元の目標

領 域	学習活動における具体の評価規準	新学習指導要領より
関心・意欲 ・態度	1 ふさわしいテーマを探して設定し、テーマに対する自分の立場を明確にして意見をもとうとしている。	
話すこと・ 書くこと	1 自分の立場と根拠を明確にしている。 2 事実を集めたり反論を予想したりして根拠を明確にし、それらが伝わりやすいように文章の構成を工夫している。 3 構成に沿って意見文を書き、友達と交流して自分の表現を見直している。	・ 社会生活の中から課題を決め、多様な方法で材料を集めながら自分の考えをまとめること（B-(1)-ア）。 ・ 自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫すること（B-(1)-イ）。 ・ 事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと（B-(1)-ウ）。 ・ 書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係などに注意して、読みやすく分かりやすい文章にすること（B-(1)-エ）。 ・ 書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて意見を述べたり助言をしたりして、自分の考えを広げること（B-(1)-オ） ・ 多様な考えができる事柄について、立場を決めて意見を述べる文章を書くこと（B-(2)-イ）
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	1 段落ごとの役割や文と文の接続の関係等を考えて書いている。	・ 文の中の文の成分の順序や照応、文の構成などについて考えること。 ・ 相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開に違いがあることを理解すること。

3 指導計画（指導時数 全5時間）

時間	学 習 活 動	評価方法
1	伝えたい意見をメモし、自分の立場を決める。	観察
2	自分の意見の根拠を明らかにするとともに、予想される反論とその反論に対する自分の意見をまとめる。	観察 ノート ワークシート
3 (構)	根拠や反論に対する考えを述べる順序を考え、意見文の構成を考える。	観察 ノート ワークシート
4	構成をもとに明らかな根拠に基づく意見文を書く。	観察 ノート ワークシート 意見文
5	意見文を読み合って相互評価を行う。	意見文、観察

4 指導の実際（3／5）

過程	主な学習活動	全体への指導：○ 個への指導・支援： ☐ 評価：◎
導 入 10 分	1 漢字テストをする。 2 前時の学習を想起する。 3 本時の目標を確認する。 4 本時の学習の流れを確認する。 根拠や反論に対する考えを述べる順序（構成）を考えよう。	※ 【 】は、指導・支援の意図 聞き取って書くテストのため、言葉を明瞭にゆっくり言うようにする【分かりやすい言葉掛け】。 ○ 隣の友達と交換し採点をさせる。 ○ 前時のワークシートを見ながら、前時の学習を想起させる。生徒が、捉えているかどうか確認するために、その箇所を指さしさせる。 ○ 本時の目標を提示するとともに、学習の進め方を小黒板で確認させる。【見通しをもたせる】 ◎ 本時の流れが確認できたか。（観察）
展 開 33 分	5 意見文の構成を復習する。 6 収集した情報を整理し、必要な情報を取捨選択する。 7 予想される反論、反論に対する考えを述べる。 8 構成メモに4段落構成で記入する。	○ 意見文の構成は、読み手との対話を意識して、相手を説得しやすくするための型であることを板書して理解させる（頭括型、双括型、尾括型） ○ より効果的な根拠を書くために、具体例やデータ等を示すように助言する。 付せん紙を利用し、必要な情報を取捨選択させる【記憶を補足する手段の活用】。 ○ 反論を出す効果を理解させる。 ○ グループで話し合う。 ◎ 自分の立場を明確にし、その根拠を示しているか。（机間指導、観察） ○ 接続関係についても考えさせるため、接続詞を記入する欄を設ける。接続詞をまとめたプリントを配付し、接続詞を考える際のヒントに使用させる。【記憶を補足する手段の活用】 ◎ 意見文の構成を意識しながら、全体の構成やまとめ方を工夫し、相手を説得できる文章を書いているか。（机間指導、観察）
終 末 7分	9 本時のまとめをする。 10 本時の学習を振り返り、自己評価を行い、次時の学習について確認する。	◎ 本時のまとめができたか。（観察、自己評価カード）